

■がん治療に関わる診療科

健診センター

消化器内科

外科

呼吸器外科

乳腺外科

泌尿器科

耳鼻咽喉科

緩和医療科

放射線治療科

病理科

ご紹介について

地域医療連携室にてお話を承ります。

総勢6名体制で各医療機関の皆様とのパイプ役として「顔の見える連携」を目指し、前方支援業務を中心に対応しております。

ご紹介以外でも何かございましたら下記連絡先にお気軽にお問合せ下さい。



●地域医療連携室

【直通TEL】043-486-5511

【直通FAX】043-486-1807

(日曜、祝祭日のぞく 平日 8:30～17:00 土 8:30～12:00)

■交通

【最寄駅から】

- ・京成本線臼井駅 ちばグリーンバス(乗車時間 約10分)
- ・京成本線佐倉駅 ちばグリーンバス(乗車時間 約15分)
- ・JR佐倉駅 タクシー(乗車時間 約15分)

【お車をご利用の場合】

- ・東関東自動車道「四街道I.C」より約20分
- ・東関東自動車道「佐倉I.C」より約20分



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
聖隷佐倉市民病院

〒285-8765 千葉県佐倉市江原台2-36-2
TEL : 043-486-5511 (地域医療連携室)
043-486-1155 (患者さま用予約センター)
FAX : 043-486-1807 (地域医療連携室)

聖隷キャンサーレター



巻頭言

キャンサーレターVol.7 発行に際して

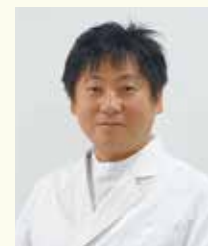
「阿」と「吽」

この巻頭言を書いている12月初旬、担当者から「これから校正なので時候の挨拶は年末か年始か微妙です」とメモ書きがありました。自分の思考を1年の終わりとすべきか始まりとすべきか分からない状況に一瞬置かれたのですが、今号の内容は緩和医療と癌検診という「終末期医療」と「早期発見」といった「終わり」と「始まり」を含むテーマであることにアナロジーを抱きました。始まりと終わりを表現する「阿吽」には万物全てが含まれているということですが、「緩和と健診」にも医療の本質全てが含まれているのかもしれない。

初詣に狛犬の「阿」「吽」を観て何かを感じてこようと思い至りました。

がん医療支援センター長 眞崎 義隆

第7号担当医紹介



緩和医療科部長
村上 敏史

- ・日本麻酔学会専門医・指導医
- ・日本ペインクリニック学会専門医
- ・日本緩和医療学会専門医・指導医
- ・麻酔科標榜医
- ・臨床研修指導医
- ・がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修修了



健診センター所長
有田 誠司

1986年 千葉大学医学部卒業 医師 医学博士
2007年 聖隷佐倉市民病院 健診センター所長
2012年 聖隷佐倉市民病院副院長
兼健診センター所長

- ・人間ドック健診専門医・指導医
- ・日本外科学会専門医・指導医
- ・日本消化器外科学会専門医・指導医
- ・日本がん治療認定医機構がん治療認定医
- ・日本移植学会移植認定医
- ・臨床腎移植学会 腎移植認定医
- ・日本医師会認定 産業医
- ・日本医師会認定健康スポーツ医
- ・日本認知症予防学会専門医および認知症サポート医
- ・がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修修了

緩和医療科

はじめに

緩和医療は「生命を脅かす病に関連する問題に直面している患者とその家族のQOLを、痛みやその他の身体的・心理社会的・スピリチュアルな問題を早期に見出し的確に評価を行い対応することで、苦痛を予防し和らげることを通して向上させるアプローチである」と定義されています（WHO 2002）。当院ではこの定義に基づき、緩和医療科を「がんによる『つらさ』に対して何かできることはないかと探すところ」と位置づけ、患者さんとそのご家族に緩和ケアを提供しています。当科の目標は次の通りです。

- ・痛みやその他のほかの身体症状の緩和
- ・患者さん及びご家族の感情的および精神的な苦悩に焦点を当てる
- ・患者さんのケアを調整する
- ・がん患者の生活の質を改善する
- ・Advance Care Planningに基づいて患者さんの人生観や価値観、希望に沿った医療及びケアを具体化する

一般的に「生命を脅かす病」にはがん終末期のほか心不全終末期などが含まれますが、当院はがん終末期ケアを重点的に行っており、心不全終末期への対応は検討中の段階です。

当院における緩和医療のあゆみ：緩和ケア病棟から緩和ケア病床へ

当院では2005年7月より一般病棟の一部で「緩和ケア活動」を開始されました。2007年6月に一般病棟を改修し専用病棟として診療を開始し、2008年6月には緩和ケア病棟の承認施設となり、2009年4月1日には日本緩和医療学会認定研修施設に認定されました。

しかし、2020年に新型コロナウイルス感染症への対応として緩和ケア病棟が休止となり、一般病棟での緩和医療の提供に移行しました。その後、2024年10月より名称を緩和ケア病床に改称し、現在に至ります。緩和ケア病床では、緩和医療科医師、病棟看護師、関連診療科の医師、薬剤師、栄養士、理学療法士、MSWなど様々な職種が連携し、患者さんご家族のつらさへの対応を行っています。近隣の在宅訪問診療施設と連携し、在宅緩和ケアにおけるバックベッド設定も行っています。

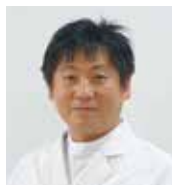
在宅訪問診療施設との連携・バックベッド設定について

緩和医療におけるバックベッド設定は、患者さんやご家族が自宅で安心して過ごせることを目的としたシステムです。普段は在宅訪問医が主治医として緩和ケアを含めた全人的なケアを提供する中で、入院加療が必要と判断した際に当院が緊急入院先として対応します。当科ではバックベッド設定となっている症例は全てお引き受けする方針としています。

バックベッド設定のメリットは、必要時に入院対応による苦痛緩和が可能であること、多くの患者さん、ご家族が感じる「何かあった時は入院可能なのか？」という不安を解消できる点です。このシステムは緩和医療の一環として、患者さん、ご家族のQOLを向上に大きく貢献しますので、ぜひバックベッド設定を活用していただければと思います。

まとめ

緩和医療は、生命を脅かす病に直面している患者とその家族のQOLを向上させる重要なアプローチです。当科では痛みや身体症状の緩和、精神的・社会的支援、Advance Care Planningに基づく患者中心のケアを提供しています。2024年10月からは緩和ケア病床として運営を続け、患者さんご家族を支援しています。緩和ケアの質を向上させるためには、地域の医療機関や在宅ケア施設との連携が不可欠と考えています。私たちと共に、より良い緩和医療の提供に取り組んでみませんか？皆様のご協力をお待ちしています。



緩和医療科部長 村上 敏史

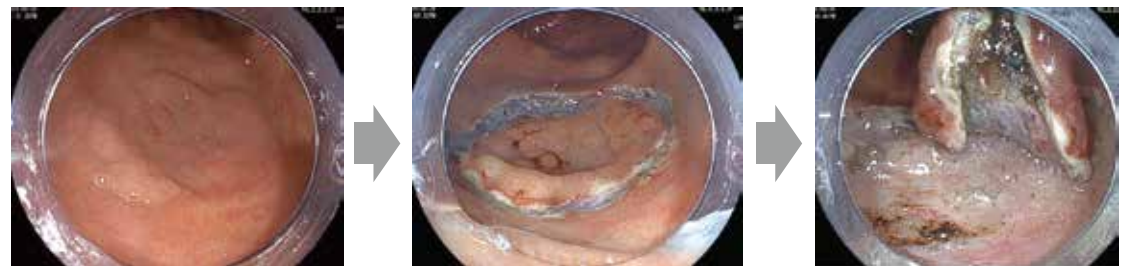
健診センター

はじめに

癌は早期発見・早期治療が肝要です。いまや生涯2人に1人が癌になり、4人に1人が癌で亡くなります。癌は、加齢、生活習慣、感染、遺伝などが組み合わさって発生しますが早期にはまず症状がありません。当健診センターでは闘病で苦しむことなく完治を達成するために、検診で癌を早期発見し治療へとつなぐ二次予防に注力しております。固形癌では1個のがん細胞が画像でとらえられる1cm大に成長するまで10～15年かかります。各ガイドラインに書かれている「早期がん」で見つけられる期間は約2～3年の間であり、そこを逃すと進行癌となり集学的治療が必要となります。日本の男性、女性の癌罹患率、死亡率（2022年国立がんセンター資料）を鑑みると、まず前立腺、乳房、肺、大腸、胃、膵臓、肝臓、子宮癌を検診で早期発見することが大切となります。日本人のがん検診受診率は、人間ドック、自治体の検診を含めても欧米に比べてかなり低く、早期発見の機会を逸している方が多いのが現状です。

当院健診センターでの早期癌診断症例

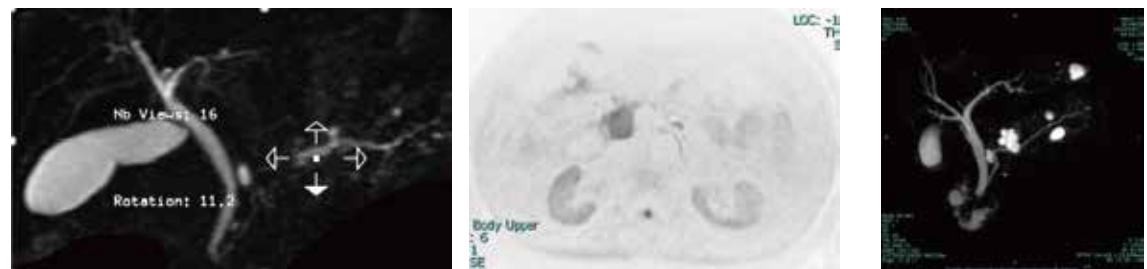
人間ドックで大腸内視鏡を受け早期S状結腸癌が見つかり、手術室で全身麻酔下にESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）を受けて完治した症例。大きな侵襲なく治療し再発もなしでした。



また、他の癌の早期発見例も多数ありますが、特に膵癌は早期発見が難しく、進展が速く予後も悪く自治体の検診にもありません。PET-CT検診を行っている施設もありますが高額で放射線を出す薬剤の注射も必要なので、当健診センターでは副作用のことも考慮し造影剤使用の検査は行わず、膵癌に対しては、腹部超音波+MRCPで対応しております。膵管走行の異常、膵嚢胞、家族歴などから、腫瘍以外のわずかな異常も要精密として病院で検査、フォローをしてもらっています。

症 例

左2写真は、当院人間ドックでMRCPを受け膵管将校の異常、DW像での腫瘍疑い症例。結果膵癌でしたが、これでもStage1B、5年生存率約50%です。1番右の症例はIPMN（膵管内乳頭粘液性腫瘍）疑い症例。



まとめ

当院の健診センターは、事業所の一般健診も行っていますが、特に人間ドックに力を入れて取り組んでおります。一般生活習慣病健診、自治体のがん検診などを違った日にばらばらに受けている現状が、受ける時間がない、面倒だとの理由でがん検診受診率低下の原因になっていると思われます。人間ドックは高いという印象を受けますが、自治体や健保組合からの補助もできますし、年齢、生活習慣、既往歴、家族歴をお聞きして通常の人間ドックにMRI、CT、内視鏡などのオプション検査も追加できます。結果処理は2重3重に行い精度管理も厳密に行っております。年1回の人間ドックで自身の健康への投資と考えて頂ければ幸いです。要精密となった症例は、近隣のクリニック、病院の先生方への紹介も多数あります。これからも要精密へのご協力何卒よろしくお願い申し上げます。



健診センター所長 有田 誠司